

## 《Lesson 1》文の途中で使われる副詞（be 動詞：肯定文・疑問文）

今回練習するのは以下の副詞について。これらの副詞は「主に文の真ん中で使われる」という特徴を持っています（どこに入れるかは後ほど説明）。

副詞	意味	例文
<b>also</b>	～も / また / そのうえ	<b>I also</b> like soccer. (私はサッカーも好きです)
<b>always</b>	いつも / いつでも	<b>Do you always</b> come here? (あなたはいつもここに来るのですか)
<b>usually</b>	いつもは / たいてい	<b>I usually</b> eat lunch at home. (私はたいてい家で昼食を食べます)
<b>often</b>	しばしば / たびたび	<b>She often</b> studies at the library. (彼女はしばしば図書館で勉強します)
<b>sometimes</b>	時々 / たまに	<b>We sometimes</b> play basketball. (私たちは、時々バスケをします)
<b>never</b>	決して～ない	<b>He never</b> listens to me. (彼は決して私の言う事を聞きません)

<頻度の程度について>

**always** > **usually** > **often** > **sometimes** > **never**  
(いつも) (たいてい) (しばしば) (時々) (決して～ない)

これらの副詞は文の種類（「be動詞の文」「一般動詞の文」「助動詞の文」）によって、使われる場所が異なります。そのため、まずは「be動詞の肯定文と疑問文」での使い方について学んでいきます（「否定文」に関しては、Lesson 4でまとめて説明します）。

### <be動詞の肯定文>

be動詞の肯定文では、基本的に

be動詞の後に副詞が足されます。

これは「進行形（be動詞 + 一般動詞の原形 ing）」でも同じです。

<例> She is **usually** late. (彼女はたいてい遅刻します)  
He is **always** studying. (彼はいつも勉強しています)

#### 【作り方】

- ステップ 1. 「副詞」をのぞいた be 動詞の文を作る。
- ステップ 2. 「副詞」を **be 動詞の後**に足す。

<例 1> 「彼女はたいてい遅刻します」という文の場合。

ステップ 1. 「副詞」をのぞいた be 動詞の文を作る。

→ 彼女は遅刻しています。

She is late.

ステップ 2. 「副詞」を be 動詞の後に足す。

She is usually late.

<例 2> 「彼はいつも勉強しています」という文の場合。

ステップ 1. 「副詞」をのぞいた be 動詞の文を作る。

→ 彼は勉強しています。

He is studying.

ステップ 2. 「副詞」を be 動詞の後に足す。

He is always studying.

## <be動詞の疑問文>

そして、be動詞の疑問文は「肯定文を作り、be動詞を先頭に持ってくるだけ」という形となります。つまり、

副詞は肯定文の時と同じ位置に残ります。

これは what や how などの疑問詞が付く場合も同じです。

<例> Is she **usually** late? (彼女はたいてい遅刻するのですか?)

Why is he **always** here? (なぜ彼はいつもここにいるのですか?)

### 【作り方】

ステップ 1. be 動詞の**肯定文**を作る。

ステップ 2. be 動詞を**文頭**に持ってきて、最後を?にする。

ステップ 3. 疑問詞がある場合は、**疑問詞を文の先頭**に足す。

<例 1> 「彼女はたいてい遅刻するのですか?」という文の場合。

ステップ 1. be 動詞の肯定文を作る。

→ 彼女はたいてい遅刻します。

She is usually late.

ステップ 2. be 動詞を文頭に持ってきて、最後を？にする。

Is she usually late?

<例 2> 「なぜ彼はいつもここにいるのですか」という文の場合。

ステップ 1. be 動詞の肯定文を作る。

→ 彼はいつもここにいます。

He is always here.

ステップ 2. be 動詞を文頭に持ってきて、最後を？にする。

Is he always here?

ステップ 3. 疑問詞がある場合は、疑問詞を文の先頭に足す。

Why is he always here?

本ファイルの著作権は、著作者である藤井拓哉に帰属します。本ファイルを利用したことによる直接あるいは間接的な損害に関して、著作者は一切責任を負いかねます。利用は利用者個人の責任において行ってください。